

鹿角市中心市街地活性化

- プログラム概要 : 鹿角市中心市街地の未来を描くためにインタビュー調査、ワークショップの実施
 実習先 : 秋田県鹿角市
 実習先情報 : 鹿角市は鉱山により繁栄したが、閉山により6万人の人口が現在、3万人を切った。当大学と包括連携協定を締結し、今回のプログラムは共同研究の位置づけをもつ。
 参加人数 : 7名
 学部学科 : 政治学科、経済学科、経営学科、社会福祉学科
 実習期間 : 令和4年8月6日～8月13日
 本学担当教員 : 小暮真人(経営学科)

1. はじめに

今回の共同研究は、鹿角市の中高生が就職や進学で鹿角を離れても、いつか鹿角市に戻ることができるための課題について対話を深めることを目的に行った。

2. 学習内容

鹿角市の中高生と当大学の学生により、ハイポイントインタビュー(これまでの成功体験、うまくいった体験、幸せを感じた経験を話してもらう)、フューチャーセッション(ホールシステムアプローチ、ブレインストーミング、KJ法、ワールドカフェ、クイックプロトタイプ、ドット投票、ラテラルシンキングとバーティカルシンキング、Uターン支援等)の実践的学習を行った。インタビューは4班体制、セッションは3班体制で実施した。

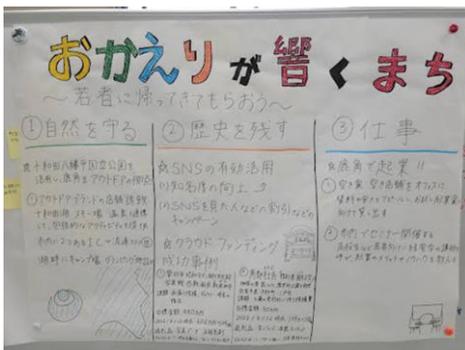
3. 提案

3.1 A班は「おかえりが響くまち」をテーマに、若者が外で様々なことを吸収し、街に帰ってくることを願い、そのときに鹿角市がどのような姿であったら良いかを考え、改善点や提案として「自然」、「歴史・文化」、「雇用」の3つの分野についてまとめた。

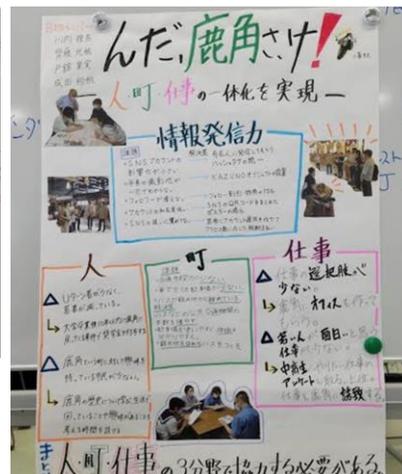
3.2 B班は、若者が面白いと思う仕事が少ないこと、地域に関心のある市民が少ないことなどを課題としてあげ、その解決には定住・移住促進、まちづくり、産業振興を連携させる必要があること、鹿角市の魅力をSNSを利用して内外に発信することについてまとめた。

3.3 C班は、鹿角市の課題をイラストマップで整理し、鹿角市で生まれ育った人だけでなく、「誰もが気軽に訪れられる鹿角」であるために、「鹿角市の魅力を地域内外へ」発信し、サードプレイスのように様々な人のための「居場所づくり」を進める必要性を訴求した。

A班



B班



C班



4. 経験したこと

○今回の活動では、インタビューしている中で特に印象に残ったものがありました。それは、人が減っているから商品が売れずお店もどんどん縮小していくのではなく、人が少なくなっている中でどう商売を続けていくかという経営者の方の考え方です。このように、厳しい状況だからそれに甘えて現状のまま衰退していくのではなく、この現状からどんなことが出来るのかと常に考えていくのが大切なんだと今回の活動で感じました。(武蔵野大学政治学部政治学科3年 佐藤昂輝)

○中高生や職員、商店街の人など多くの方が鹿角市を愛しており、人口が減少し街が寂しくなっている現状に問題意識を持ってはいるが解決に向けて行動に移している人は少ないように感じた。行動に移そうと思っても何をしたら良いかわからないこともあると思う。また、1人でできることは限られている。そのため、街をあげて取り組み、街の住民が同じ意識を持って課題解決に取り組んでいくことが大事であると感じました。今回対象としたエリアは鹿角市だけでしたが、同じように人口流出により衰退が見込まれる地域は数多くあります。それぞれの地域に合わせた解決策を考えることは大事であるが時間がかかるため同時に救えるような共通の解決策を考えることも大事であると思いました。(武蔵野大学政治学部政治学科3年 齊藤光祐)

○2日間、話を伺った。これまでずっと鹿角市に居られた方、鹿角市で生まれ育ち、進学で離れたが、戻ってこられた方、生まれも育ちも鹿角市ではないが、鹿角市に注目している方など多くの方々の意見を聞いた。多くの方にお話を伺うことで多様な意見を拝聴できた。もちろん、他の方と意見が180度異なっている声や、商店街の衰退にショックを隠しきれない声などとても切実なものも含まれる。しかし、それらは全て愛のあるものだった。鹿角に対し愛があるからこそ忌憚のない意見であると感じた。それはある種の郷土愛というものなのかもしれない。また、同時に大学生として実のある提案をしなければならないという責任も感じた。成果発表の内容をお話を伺った方々や鹿角市民の方々の厳しい目でご精査頂ければ、このプロジェクトに参加した者としてこれ以上のものはないと思う。(武蔵野大学政治学部政治学科2年 田村康祐)

○私は、この1週間を鹿角市にみんなと住んでシャワーが使えないことやトイレが流れなかったことなど普段1人暮らしをしている時には考えられないことばかり起きてとても刺激的な生活を送ることができました。これからはどんな生活環境でも住めると思います！(武蔵野大学経済学部経済学科3年 高橋佳希)



○今回の発展FSを通して、人とのつながりを改めて実感しました。ここでいう「人とのつながり」とは、目に見えるものもあれば、目に見えないものも含まれます。よく、「コロナによって、人とのつながりが希薄化している」と言われがちです。しかし、それは今まで見えていた繋がりが、見えにくくなってしまっただけで、実際はそうではなかったことを学びました。1人1人が何かしら地域に関わっており、コロナ禍であっても、自分にできることを一生懸命行っていたのです。

私たちが計画通りに動けるよう、事前に準備して下さった鹿角市の職員さん、暑い環境の中で、大学生と同じスケジュールをこなした中高生、そしてなによりも、私たちを温かく受け入れて下さった鹿角市の住民には、感謝しかありません。1週間という短い時間の中、武蔵野大学の学生ではなく、鹿角市の住民の1人として、鹿角市に携えることができ、貴重な経験を、本当にありがとうございました。(武蔵野大人間科学部社会福祉学科3年 安江里花子)

○呉服店のインタビューで『若い人たちが鹿角に来てくれて嬉しい』と歓迎していただいたり、お昼ご飯を食べに伺った美ふじで「きりたんぽ」をサービスしてもらったりと、鹿角市民の方々の暖かさを身近に感じた事がとても印象に残っています。中高生とは、鹿角の未来を考える活動をする中で、お互い打ち解け合いお昼ご飯を「喫茶店Queen」で一緒に食べました。良い関係を築くことができ、良い思い出になりました。(武蔵野大学経営学部経営学科4年 川内理奈)

○どこに行っても暖かく親切に迎え入れてもらえて、とても居心地の良い街だと感じた。各インタビュー先でどの方々も、若者は鹿角の外に出て、広い世界を学び、鹿角に還元して欲しいということをおっしゃっていて、街全体が若者を応援するような雰囲気を感じて、今後若者が帰ってきて、力を還元する場があれば良いなと思った。(武蔵野大学経営学部経営学科3年 榎本耀)

5. 今後の展開

来年度も継続する

6. まとめ

地域で育った子供たちは、よほどのことがなければ、育った地域のことを嫌いになることはない。地域を離れるのは、大学、仕事、遊び場がないからであり、鹿角にいても大学で学べ、東京と同じように働け、遊ぶことができれば、鹿角を拠点に選ぶ人が増えるかもしれない。



参加学生と鹿角市の中高校生(中央前列は関鹿角市長、中央後列は小暮本学特任教授)